

Rev. T. KUGIMIYA
HOW TO KNOW GOD.

BY
Rev. T. KUGIMIYA.

神
を
知
る
道

牧
師
釘
宮
辰
生
述



020324-000-7

特52-544

神を知る道

釘宮 辰生/著

M42

ABI-0130





收師釘宮辰生述

知
る
道

東京
警
醒
社
書
店

明治
42 10 7
内交

神と知る道

廣島メソヂスト教會牧師

釘宮辰生述

○御製の歌

目に見へぬ神に向ひて恥ざるは

人の心の誠なりける

○二宮尊徳の歌

昨日より知らぬ明日の懐かしや

元の父母(造物主)を
おしそせはらんや

○本居宣長の歌

天地の神の恵みしなかりせば

一日一夜もあり得てまじや

○使徒保羅の語

それ人の見る事を得ざる神の永能と其の神性とは造られたるものにより、世のはじめよりこのかた覺り得て明かに見るべし。羅馬一〇十九、二十
我等は神によりて生き、動き、また存ることを得るなり（使徒行十七〇二十八）

基督教の根本は有神の信念である。故に神のいますこと、その神の性格を識るにあらずば基督教の宗教は無意味となる。ごう見ても此の宗教の中心は神の觀念と信仰である。故に神を知る事、是れ我等が務むべきの第一歩と云はねばならぬ。

神を知るの道が三つある。神を推知する事がその一。神を感知する事が其二。神を信知する事が其三。之を推知するは人の理性の働。感

知するは情性の働。信知するは意志の働。斯く三方より得たる知識こそ全備せる知識と云ふべき者であつて、結局最も健全なる信仰は此知識の上に建らる。

一、神を推知する道

目に見えず、手に觸れざる或る者を知る力を推知力と云ふ。人間天賦の性能にして尊きものは此の推理推知の力である。是ありて人は地下千尺の下に藏れある寶を發見し、億萬里外の大空に隔たれる天体の組織を窺ひ、或は百年後に起り來るべき事柄を豫知す。此推知力の進みし人多き社會は文明の進歩したる國と呼はる。併しながら現代教育の傾向は單に理性のみ發達せる人を造るにあるが如くに思はるゝが此は考へ物である。

約翰四〇
二五〇

さて神は我が目、見る事を得ず。我が手、觸る事能はざる靈である。故に基督は「神は靈なれば拜するものも靈と誠をもて拜すべし」と教へたまふた。かく神は靈なれば靈のこころを辨へ得る能力をもてる人のみこの神を知り得べきは當然のこころである。見よ禽獸に信神の思想なく。只だ人のみ是を有す。即ち人は目に見るべき物象界の外に目に見へざる大靈の實在を認識することが出来る。是れ人には見へざるもの即ち靈なるものを知るべき靈妙なる力が存するからである。

さて神を知らんと願ふものはまづ宇宙を知らねばならぬ。即ち仰て天体の運行を見、俯て地上の萬物を窺ふべき。此の森羅萬象の間に整然たる組織と調和の存するを認めざるを得ない。かく無數の物体と複

雑なる萬象の間に整然たる組織と調和の存するを認むるものは、更に一步を進めて此の不思議なる大組織と大調和の偶然に成りしものなるや否やを靜かに考へざるを得ない。かくして天地萬象の間に現存する不思議を思ひめぐらす時は、必ず此の天地の成立は偶然の結果にあらずして靈妙なる組織者、意匠者、創造者ありて此等を組織調和せりこの推論に達するであらふ。試みに思へ、我が太陽を中心として其の周圍を回轉せる水星、金星、及び我が地球其他火星、木星、土星、天王星、海王星の諸星が、一定の軌道に一定の方向に一定の關係を亂さず、整然と運行せるが如き、思へば驚くべき不思議である。殊に太陽と諸星の間にある引力と、諸星が太陽を遠ざからんとする遠心力の平均せるは實に驚くべき調和である。若し地球と太陽の間にある引力地

球の遠心力より強大ならんか、地球は遂に太陽の熱火中に吸収さるゝ
であらう。是に反してもし遠心力強からんには、天外萬里の外遠く太陽
系の外に飛び去るであらう。然るに不思議や、此の引力と遠心力は相平
均し相調和して居る。故に此の太陽系は亂れる事なく諸星はその周圍
に整然たる運行をなして居る。此の不思議なる天体の調和は果して偶
然の結果であらう乎。將た大匠、大計畫の結果であらう乎。思ふに
常識あるものは此の奥妙なる配合及び調和に満てる天体を以て偶然に
成りしものと思ふことは出来ぬであらう。然らば此の如き驚くべき天
地萬象は大智大能の創造者が斯くは組み成したまひしものなりと思惟
すること、却て我等の理性を満足せしむるものではない乎。我等は斯
く推考して宇宙に靈妙なる大智大能の神いますと確信する者である。

是れ即ち目に見へぬ神の實在を推知するからである。
或る人は説をなして云ふ。此の天地は無数の元子より成れる者にし
て物質元子の合成体に過ぎず。斯く論じて天地の造り主なる靈の神
を認むる事をせない。是れ果して眞理であらう乎。然り此の天地が物
質より成れるは事實である。されど物質のみによりて天地萬有は構成
せられたのでない。無数の物質元子のかく配合組織せられ居る間に靈
妙なる智慧はこもつて居る。この靈智の働なくは無数の物質のみ混在
するも斯く整然たる大組織の成立すべき筈はない。無数の物質、靈智
者によりて適當に案配せられてかくは奥妙なる調和と秩序ある組織体
は成りしたのである。然らば萬有は靈妙なる智力によりて構成せられた
りこ主張する天地創造説こそは寧ろ常識よりして眞理と判断すべきで

はない乎。

八

思ふに物質元子は天地成立の材料である。かゝる材料如何に數多く混在するも自己のまゝにては到底一の組織体を創造し得べき筈がない。「い」ろ「一」は四十八文字幾十萬が混在するも、そのまゝにして本居翁の歌「天地の神の恵みしなかりせば一日一夜もあり得てましや」なる一句の出来る筈がない。蓋しこゝには「いろは」の文字外に歌人の思想がこもつて居る。此の思想に従ひ、適宜の文字をならべ、始めて思想を現はす歌となりしが如く、此の天地も物質元子の配合の間に神の靈智加はりてこそかくは靈妙なる大組織体の天地となりしのである。時計師の時計を造るも、建築師の家を建てるも、皆な材料を配合せる智能の働によりて成るのである。金屬の小片多く混在するも時計師の工

夫ご工作なくば時計は出来ぬ。木材ご土砂其他の物集まるも建築師の意匠によりて組み合せらるゝにあらずば一棟の小家も出来あがらぬ。かく思ふとき此の天地の大構造が大智ある造物主によりて創造せられたりご推論して靈なる神の存在を信ずることこの迷信にあらざる事が知らるゝであらう。

然るに尙ほ屈せざる論者がある。曰く、此の整然たる自然界は長き進化の結果である。決して大工が家を建て、時計師が時計を造りし如きにあらずご。然り然り、此の天地は長き進化の結果なりとは眞理である。然ごこの長き進化は決して偶然の變化ではない。盲動的の變遷ではない。皆な悉く一定の理法ご秩序の中に進化し、完成して來たのである。然らば今日までに斯くも進化しました以後も尙ほ進化せんごす

九

十
るは是れ大意匠者即ち神の測り知れぬ靈智靈能の統治指導の下にかく
進化し又完成されしと云ふも何の不可かあるべき。萬有進化は偶然に
あらず。靈妙の神かくなしたまふなりと推論するは、この進化を盲動
的と考ふるより遙かに合理的と云はねばならぬ。

見へざる神を知らんと思ふものは物外に靈智の働を認むる能力がな
くてはならぬ。唯だ肉の事や物界の事のみを思ふ人は兎ても靈の神を
認むることは出来ぬ。目に映じ、手にふれし事の外は一切我れ知らず
と云ふ人は到底此の靈妙なる神の實在を確認することが出来ぬ。然ら
ば神を知るの一道は目に見へぬ神を推知する事である。使徒パウロが
「さうり得て明かに見へし」と云ふたのは此道によるのである。

二 神を感知する道

余は前段に於て我等が推理力によりて靈なる神の實在を推知し得る
事を述べた。今は更に進んで神を感知する事を述べようと思ふ。是れ
即ち靈眼をもて靈神を見ることを云ふので、即ち神を直感するのであ
る。抑も靈なる神を感ずると云ふは甚だ六ヶ敷言ひ方ではあるが併し
かく言ふの外に適當なる言ひ方を知らぬ。故に余はまづ實驗上自ら神
を感知したる實例を示すこととする。

余嘗て國手高田畊安君經營にかゝる相州茅ヶ崎病院に一泊して旭日
の登るを見し事があつた。夏日の朝涼しき濱風に吹かれつゝ茅ヶ崎の
小高き丘に立ち東方を眺むれば恰もよし旭光將に淡墨色の遠き山蔭よ
り顯れ出んとする所である。實に其光景は何とも云ひ様がない。殊に
濱邊の白砂と磯打る波の麗しさ。海には近く烏帽子岩の奇巖と江の島

が見へ、丘の一面は緑濃き生々たる小松原際涯もなく打續きて居る。
 今や我れ自然美の聖殿に立てるが如く感じた。時に東方の天に現はれ
 し旭日は次第く、に昇り来りやがて淡墨色の遠山の上に高く輝けるそ
 の勢實に旺なものであつた。此の壯觀此の美觀の間に立てる我は思は
 ずも靈妙なる神を感じてその心動き自己を忘れて嗚呼大なる神と叫び
 て祈禱を捧げた。此時我が心は神を見たさ感じた。此感は實に強きも
 のであつて我は實際神の前にありその榮光を見たりと感興された。其
 後今日に至るまで余は此の靈覺を回顧して幾度も冷靜なる批評を加へ
 て見たが、而かも其時見たる物象の我が目に映りし外に一種の靈感我
 が心を打たるは打消すことの出来ぬ事實である。此の靈感こそ是れ我
 が神を感知したる實驗である。

かくの如きは幾多の人々が實驗せる處であつて熱烈なる篤信家の如
 きはその一生涯に幾度も經驗せる事實である。是れ理性の承認を得て
 知るのでない。感情によりて感じて知るのである。かく神を直感した
 る人の信仰は温かい處がある。また一段堅き處がある。
 余或る日受洗せんことを願ひ出し者に對ひ、君は如何にして神を知
 りしやと尋ねたるに、彼曰ふた。我は多くの宗教書を讀み、幾多の説
 教を聽き、また議論を闘はし、遂に屈服して有神論者の一人となり、
 其後云ふものは機にふれては有神論をふりまき、神を信ずる事の理
 に適へる事を主張したる久しかりしかば、其實は暗中神を認めしが如
 く、また壁を隔て音を聞くが如くをぼろであつた。然るに過る日、月
 なき暗夜、人なき草原に打すわり、靜かに天のかなたよりこなたを眺

めつゝありし間、燦爛たる無数の星、暗黒を破りて我が目に映ぜし瞬間、我今神前に我ありこの念、嘗て経験せざるほど強く心に感じ、思はず嗚呼我か神と叫び祈りしが、恰かも神と相對して物語りしが如く明かに神を見つゝ祈つた。我は其時まで幾度も祈りし事がありしも未だ曾て斯く斗り神の聖坐に近かく進みて祈りしことはなかつた。此時我は神を疑ふ能はざる所の信仰に入つた。

かくの如き實驗は其人の心直接に神を感じて知るのである。幾多の篤信家はかゝる實驗をなして居る。此の實驗ありしものは神と共にあるの念常にその心中にあるのである。かくて其人の宗教は活氣あるものとなる。綱島梁川氏の病間録に記せし「我か見神の實驗」も全く此の種の經驗に外ならぬ。而かもかゝる經驗を得るの機會は一定して居

らない。或は讀書の間に來る事がある。或は百難千苦と奮闘せる間に來る事がある。或は密室にて祈る時に來る事がある。或はリバイバルの集會にて來る事がある。其機會は種々あるも其の實驗は一である。即ち明白に神を見たが如く感ずる事である。

馬太五の

主の山上垂訓に「心の清き者は福なり。其人は神を見る事を得べければなり」こあるが、蓋し神を見るとは明かに神を感ずるを云ふのであらう。茲に見ることは感ずる事である。強く感じて疑をさしはさむの餘地がなくなる。かくの如く神を疑ふの餘地なきまで感ずる時、我等神を見しと云ふも如何んぞ之を迷信と云ふべき。かく神を感知することは敬神の念自ら胸中に湧き出で、神を慕ひ奉り之に感謝祈禱すること止み難き事となる、是が宗教である。

三、信じて知る道

約翰六の
六九

聖書に「知りて信ず」と云ふ語がある。是は理性と感情が共に働き
て信仰に至つた状態を云ふものであらう。そもく此の天地は偶然に
成つたのでなく必ず神によりてかく造られたるものであると認めてこ
ゝに造り主なる神の實在を推知するは理性の信であつて、斯て又神
は造物主と直感して之を信ずるは感情の働きである。更に一
つ大切な信がある。此は意志の働きであつてその知り得たる神に信
頼皈依することである。この信頼皈依が我が心となつて來ること、神
の事は實驗的に一層は一層と解つて來る。而して終に「父は我を獨り
遺たまはず蓋我れ恒に彼の心に適ふ事を行へばなり」と云ふ高尚なる
經驗に達するのである。

約翰八の
二九

抑も信ずることは心の活動であつて、信じて頼る事、信じて親しむ事、
信じて相談する事、信じて打明ける事、悉皆信ずるよりなされるので
ある。信仰なくば祈る事も、告白する事も出來ぬ。我等神を信ず、故
に祈るのである、親しむのである、服従するのである。かく神に従ひ、
神に祈る、是れ信仰が實行に顯れた處である。かゝる實行のともなは
ざる信仰は眞正の信仰でない。

然らば「信じて知る」とは神に服従していよく神を知り、神と親
しみ、神に交はり之に信賴していよく神を知るに至る状態と理解せ
ねばならぬ。即ち實驗的知識の意に外ならぬ。而して此の實驗的知識
こそ宗教家の常に味はねばならぬ處のものである。かくして得たる處
の實驗上の知識こそ「信じて知る」底の知識である。是れ神を知るの

道として尤も大切なるものである。

人を知るにも三つの方法がある。人の品評を聴き又は人物評を讀みて其人を知る事其一である。時々其人の行動を目撃し或は其人の意見を聴きて其人を知る事其二である。是れ傳へ聴くよりも更に直接に知る事である。然る人を知るの道これ終らぬ、モ一一つある。然らば尤も善く其人を知るの道は如何。他なし、其人と親しみ、其人に頼り其人に従ひ、其人に服す、是れ眞に人を知るの道である。余が神を信じて知るの道と云ふは即ち此の意義に外ならぬ。

かくの如く其人の全体を知るは其人に接し又親しむにある。我等が神を以て至愛至善の天父なりと明かに覺るの道は實にその神を親しみその神に歸依しその神に服従するにある。かく神と親しみ、之に祈り

常にその聖旨に遵ふ時は、神を知ること深くなり、従つて神の靈的感化を蒙る體である。即ち宗教的活生命の源泉に觸るゝよりして我信仰生活は堅實豊富なるものとなる。斯る人は枝の幹に連なりて其生命を得つゝあるが如く、我が心神に結びつきて神の生命を得つゝある。宗教の極意は此所である。耶穌を見よ。彼は神の旨を成す事をもてその糧とせられた。是れ活神を信知するからである。彼は神の聖旨なるが故に十字架にかゝりたまふた。彼は聖旨の如く歩み、聖旨の如く語り、聖旨の如く爲したまひて、「我が來るは我が心を爲さんためにあらず、我を遣し、者の旨を爲さんためなり」と語りたまふた。かくまで耶穌は神に信頼歸依したまふた。實に彼は凡の時、凡の機、神を離れず、我と神とは一なりと云ひたまひしまで神と親しみ給ふた。耶穌は天父

はその獨子を世に遣したもふほごに世の人を愛したまへりご教へたまふた。我等も彼に倣ひて神を信じ神に親しみ神に交る時始めてよく彼を知ることが出来る。かくして得たる活信活知を有する者こそ靈的生命を得たる眞正のクリスチヤンである。

結論

抑も宗教の極意は何である歟。他なし、神と我との親しき交通に外ならぬ。即ち此の五尺の身體を支配する我、宇宙を治めたまへる全能全智の大靈と親しみ彼に服従して神人一和の妙味を實驗することは宗教の極意である。神の國の奧義とは即ち此の神人調和の實驗を云ふのである。故にクリスチヤンたる者は神の實在を認むるに止まらず、その御性格を知りて、之を信じ、之を仰ぎ、之を慕ひ、之に依り、之

に親しみ、之に従ふことを勉むべきである。かく神と人との間に靈的交通生ずる時、驚くべき宗教的靈化は我が心の上に来るを實驗するであらう。神を信するものに克己の力ありと云ふは是た。然り、是れ神の靈化を蒙れるが故である。神を信するものは誘惑に勝つと云ふは是だ。然り、是れ神の靈我が心を治むるからである。神を信するものは徳に進むと云ふは是た。然り、是れ我が心絶へず神の感化をうくるからである。かく宗教的恩化を蒙るの發端は神を知ることである。然らば神を知るに至る道を辿ることは是れ豈人間たるもの、第一心掛くべきことではない歟。

神を知る道終

明治四十二年七月廿四日印刷
明治四十二年七月廿七日發行

不許
複製

定價四錢

述者 釘宮辰生

發行者 東京市京橋區尾張町二丁目十五番地 福永文之助

印刷者 橫濱市太田町五丁目八十七番地 村岡平吉

發行所 東京市京橋區尾張町二丁目十五番地 警醒社書店

印刷所 發行者山下町八十一番地 福音印刷合資會社

(電話新橋一五八七)

△野氏述
 △基督信徒の緊急問題
 △基督信徒の生命の主

△基督教談
 △基督教通
 (朝の巻)
 (夕の巻)
 (聖日の巻)

紙數四百頁 紙數四百二十頁 紙數五百三十頁
 定價 定價 定價
 金三三 金七八五 金十

△基督教の辨證
 △基督教の本原
 △基督教の文學
 △基督教の概論
 △基督教の歴史
 △基督教の神學
 △基督教の倫理
 △基督教の藝術
 △基督教の社會
 △基督教の未來
 △基督教の中心
 △基督教の精神

◎基督教叢書 星野光多君編輯 各一部 定價 金廿錢 郵稅 金四錢

宣教開始十五年紀念

傳道叢書

星野光多君編輯

▲最	▲信	▲福	▲生	▲基	▲神	▲純	▲最	▲信	▲有	▲久	▲運	▲神	▲耶	▲眞
大	仰	音	命	督	を	大	大	仰	情	遠	命	の	蘇	の
益	の	の	の	の	知	福	の	は	の	成	と	現	の	直
事	義	髓	音	救	道	音	問	や	神	督	仰	在	法	神
石	小	有	今	露	釘	星	デ	大	光	平	柏	武	阿	山
坂	松	馬	井	無	宮	野	フ	谷	小	田	木	本	部	田
龜	武	純	壽	文	辰	光	オ	レ	太	平	義	喜	清	寅
治	治	清	道	治	生	多	ス	博	虞	三	圓	藏	藏	之
君	君	君	君	君	君	君	ト	士	君	君	君	君	君	助
述	述	述	述	述	述	述	述	述	述	述	述	述	述	君

(行刊々續他其)

△野氏述
△魁りたる生命の主
△基督信徒の緊急問題
△基督信徒の一死一生

定價 金三錢
定價 金三錢
定價 金三錢

△基督教談
△基督教思
△基督教通
△基督教觀

紙數四百頁 定價 金七十五錢
紙數四百二十頁 定價 金八十五錢
紙數五百三十頁 定價 金十錢

（星野氏修養三書）

△基督教辨證
△基督教の本原
△聖書の價值
△舊約聖書文學概論
△福音書の概論
△保羅の著述
△耶穌の三大觀

有馬純清君著
巖無文治君著
高橋卯三郎君著
今泉眞幸君著
山鹿族之進君著
宮川巳作君著
八瀨徳三郎君著
星野光多君著

△基督の復活
△靈魂不滅論
△現世生活
△現世未來
△基督教の中心祈禱
△基督教小史

小崎弘道君著
柏木義圓君著
山田寅之助君著
武本喜代藏君著
星野光多君著
柏井 園君著

◎基督教叢書

星野光多君編輯

各一部 定價 金廿錢 郵稅 金四錢

宣教開始十五年紀念

傳道叢書

星野光多君編輯

▲眞の直説 神法在
▲耶蘇の現 神在
▲神の現 神在
▲運命の信 神在
▲久遠の基 神在
▲有實の基 神在
▲信情の神 神在
▲最大の學 神在
▲純福の學 神在
▲神を知らる 神在
▲基督の福 神在
▲生命の福 神在
▲福音の真 神在
▲信の要 神在
▲最大の益 神在

山田寅之助君述
阿部清藏君述
武本喜代藏君述
柏木義圓君述
平田平三君述
光谷小太郎君述
大谷小太郎君述
デフォレスト博士述
星野光多君述
釘宮辰生君述
露無文治君述
今井壽道君述
有馬純清君述
小松武治君述
石坂龜治君述

（其 他 續 刊 行）

